

平成三十一年度 九州国際大学付属高等学校

国語 入学試験問題

問題冊子（1～16ページ） 試験時間（50分）

注意事項

1. 試験問題は、試験開始の合図があるまで開けないこと。
2. 試験開始後、問題冊子の印刷の不具合などに気付いた場合は手を挙げて監督者に申し出ること。
3. 解答はすべて解答用紙に記入すること。
4. 携帯電話、計算機、アラーム等の使用は禁止する。
5. 体調不良等の場合は、監督者に申し出ること。
6. 問題冊子は、各自持ち帰ること。

字数制限のある問いについては、句読点も一字とします。

— 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

職業柄、学生と接する機会が多い。楽しいことも多いが、時おりもう少しおおらかに生きてよと、切なくなることもある。

それは「私などとてもとても」といった強い自己規定が垣間見えることによる。自己評価の慎ましきである。じれったい。

彼らはいつ頃から自己評価という習慣を教え込まれるのだろう。「〇〇ちゃんを見てごらんなさい。それに較べてあなたは」などと言われ続けて育つと、いやでも他との比較のなかで自分を見られないようになるものだ。

自分を客観的に見るのは悪いことではない。しかし、それがいつも誰かとの比較であったり、合格ラインからの距離としてしか意識されていないとしたら、ひたすら後ろ向きなそんな自己規定は、自らの可能性をあらかじめ封印無化するという点で害にこそなれ、益するところは何も無い。

客観的な基準を欠いては評価そのものが成立しないから、ある一つのキニツの断面で誰をも切り取ろうとするのが評価の視線であり、きわめて限定的なある断面に投射された影が評価という数字にヘンカンされる。つまり評価というものは、原理的に、みんなに同じ物差しをあてて判断できる項目についてしか、測ることができないのである。一篇の詩を読んで、そこにどのような豊かなイメージを膨らませることができるか、そんな問題は評価の場では絶対に出ない。客観的評価が不可能だからである。

評価できる能力というのは、誰が採点しても同じ結果が出てくるような対象に対してだけ、それを量ることができるのであり、それがその人間の評価の全体像では決してないことは言うまでもないだろう。I、試験などによる評価は、その人間のもっとも大切な部分については、もともと歯が立たないものなのである。

さらに、試験を含めたすべての評価は、〈現在および近過去〉だけを評価するものであり、それ以上のものではないということもいま一度確認しておきたいところだ。評価とは、常に〈現在の〉しかもある側面だけにシヨウテンをあてたきわめて限定的なものである。

ところが、その限定的な評価が一人歩きを始めると、あたかも個人の全体であるかのようなオーラを持ち始める。II、その限定的な〈現在の〉評価が、そのまま未来へ投射され、

未来を規定する大きな要因となりやすい。未来は現在に依存はするが、地続きではない。現在が未来を規定し、限定することがあるとしたら、その要因は、自分の力はこれくらいのもものだから

という萎縮した自己規定以外のものではない。

評価というものは、それが良ければ自信をもってさらに励み、悪ければ、それを分析してコク
④
フクでできるように対策を練る、そういう使われ方をした場合にのみ意味を持つ。 III
評価そのものが自己目的化してしまい、評価を生かすのではなく、それに縛られてしまうという
場合のほうがあツ トウ的に多いのが現実である。まして、その現在の評価が将来の自分を決定
づけてしまうような、評価への依存は（ X ）、まったく意味を持たないものなのだと、ま
ず自覚をしてほしいものだと思う。「私はまあこの程度のものでございます」といった値札をぶ
ら下げて歩いているかのような若者が多すぎるのだ。

第三者による評価なら、それは他人が勝手にやっているのだから、俺には関係ないよと突き放
しておくこともできる。だが自己評価となると、自分で下した評価なのだから、どうしてもそれ
に縛られざるを得なくなる。そんな余計な縛りは何の意味もない。

自分をどこかにピン止めして、位置づけておけば安心ではある。しかしその安心は、おうおう
にして「そこそこでいいか」という消極性にスライドしてしまいやすいし、高望みしても無理だ
と諦めに結びつきやすい。

評価なんて知ったことか、やりたい奴にはやらせておけ、くらいの気概を持って、自分を敢え
て位置づけないこと。それは確かに不安ではあるうが、安易な自己規定からは決して開くことの
できない、未来の可能性を押し開くものでもあると思うのである。

安易な、そして消極的な自己規定、自己評価から自由であり続けること。自分を評価しようと
しないで、^④ 敢えて自分を宙づり状態の不安のなかに置き続けること。そんな〈未決定状態〉こそ
が、何かのきっかけがあったとき、一気にその何かに邁進する推進力となるのである。安定した
自己規定からは、そのような推進力は生まれない。自分の可能性は、自分ですらまだ知らないも
のなのだと、いつもいつも思っていて欲しいのである。

（永田 和宏『知の体力』から）

（注）※ オーラ——独特の雰囲気。

問一 二重傍線部①～⑤に相当する漢字を含むものを、次の各群のア～エのうちからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

① キンイツ

- ア キンチヨウ感が高まる
- イ キンリが上がる
- ウ キンシ事項
- エ キンコウを保つ

② ヘンカン

- ア カンキセンを回す
- イ カンコウキヤクが増える
- ウ 学問へのカンシンが高まる
- エ カンペキを求める

③ ショウテン

- ア ショウジョウをもらう
- イ ショウソウ感を抱く
- ウ ショウキョ法
- エ ショウゲキを受ける

④ コクフク

- ア フクシキ呼吸
- イ 薬のフクサヨウ
- ウ シチフクジン
- エ 相手にフクジュウする

⑤ アットウ

- ア 選挙でトウセンする
- イ トウロン会
- ウ トウチ法
- エ 雑誌にトウコウする

問二 空欄

I

く

III

に入るものとして、最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア ところが

イ さらに

ウ たとえば

エ むしろ

問三 傍線部①『私などとてもとても』といった強い自己規定」とありますが、「自己規定」の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 社会常識から外れないように自分を律し、常に他者のことを考えて行動をすることで、安定した人間関係を築き、より良い社会の一員になる意識を高める効果がある。
- イ 他者と同じ基準で比較されて作られる「自己評価」と同じ意味で使われ、個人に高い理想や希望を抱かせることを邪魔してしまい、消極的な行動を引き起こしやすい。
- ウ 学校教育などで教えられている自分の力を最大限に伸ばす考え方で、大人が若者の誤った自己認識を正し、未熟な考えのもと失敗することを防止する効果がある。
- エ 自己の能力を客観的に見つめる評価のことで、多くの人々に冷静な判断を促すとともに、それまで消極的であった自分に対して飛躍的な変化をもたらすものとなっている。

問四 傍線部②「客観的評価が不可能だからである」とありますが、「客観的評価」が可能なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 推理小説の人気度
- イ 絵画から受ける感動
- ウ 家族における絆の深さ
- エ 将来に対する不安

問五 傍線部③「あたかも個人の全体であるかのようなオーラを持ち始める」とはどういうことですか。「限定的」、「人間の評価の全体像」という言葉を必ず使って、五十文字以内で説明しなさい。

問六 空欄（ X ）にあてはまる四字熟語として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 大同小異
- イ 同工異曲
- ウ 本末転倒
- エ 空理空論

問七 傍線部④「敢えて自分を宙づり状態の不安のなかに置き続けること」とありますが、筆者がこのように考える理由について次のように説明しました。

a

く

c

に入る

最も適当な言葉を、それぞれ指定された字数で本文から抜き出して答えなさい。

自己評価をする際に

a (三字)

な態度で自己を規定すると、

b (二字)

や安心

は得られるが、自分の

c (三字)

を狭めてしまうことになるから。

問八 次に示すのは、四人の生徒が本文を読んだ後に話し合っている場面です。本文の内容をふまえて、趣旨に最も近い発言を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 生徒A——筆者は仕事の関係上、多くの学生と接しているなかで、自分のことをわざと低く評価する学生が多くなってきたと感じているが、その原因として激しい受験競争や親からの厳しい教育のなかで育ってきたことを挙げているね。

イ 生徒B——たしかに。私は小さい頃から多くの試験を受けるなかで、他人との学力差を痛感して自分を低く評価してきたわ。けれども、試験で出た結果は客観的で信用できるので、結果をしっかりと受け止めて将来を決めたいと思うの。

ウ 生徒C——そうかなあ。試験の結果や他人からの評価は重要だと思えないほうがいいんじゃない。それに将来のことだって、まだわからないって態度でいたほうが、将来何かをやるうとした時にうまくやっていけるんじゃないかな。

エ 生徒D——わかるわ。試験の評価なんて全く関係ないと私も思うの。でもね、自分のことを正確に理解したり、自分の弱点を分析的に考えたりするためには、能力の数値化は大事だし、良い評価を得ることが目的になっても仕方がないわ。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

以下の文は、中学二年生の莉子^{りこ}が、祖父との思い出を回想する場面である。莉子には、新しいお母さんである「麻美^{あさみ}ママ」がいて、いつしか自分にとっても弟^{りく}の陸^{りく}にとっても、かけがえのない存在になっていた。しかし、ある日、父の部屋の書棚から母のアルバムが奥のほうに片づけられていることに気づき、母の生まれ故郷である祖父の家に向かわずにはいられなくなった。

「莉子、もうだいじょうぶや」

という祖父の声が聞こえた。

「ここからは、もつと楽に歩けるようになるぞ」

そのことばのとおり、祖父のそばまでいくと、ちょうど背の高さに合わせるように草や枝葉をからませて、平らな天井が作ってあった。甘酸^{あまじ}っぱい香りも漂^{ひら}っていて、目^めを凝^こらすと、そこここに黒くて小さな実をつけた房が垂れさがっている。

「山ぶどう?」

思わず声をあげると、

「ああ、そうじゃ」

と、祖父がこたえた。

そうか。ここは、お母さんの言っていた秘密のトンネルの中なんだ。あの抜け道は、ここにっながってたんだ。

莉子は、山ぶどうの実をひと粒もぎ取ると、そっと口の中に放りこんでみた。たちまち顔中をすばめずにはいられないような酸っぱさが広がって、それを見ていた祖父は、

「そのままじゃあ食べられんやろう。ジャムにでもせんとな」

と言って笑った。

「どれ、今年はぼくがジャムを作ってやろう」

「ほんとに?」

「ああ、うまくできたら送ってやるよ」

そうして祖父は莉子に背を向けると、出口を目指して再び歩き始めた。しばらく行ったところで進路をふさぐように雑草が茂っていて、それを払いのけたところが「秘密のトンネル」^①の終着点だった。

やっこの思いでトンネルを抜けることができた莉子は、はあ、と息を吐^はいた。

目の前には、見覚えのある銀杏いちょうの老木が生えていて、その向こうにはお墓も見える。抜け道は、確かに墓地に通じていたのだ。

② 莉子は、銀杏の木の根もとに立って、はらはらと舞い降りてくる落ち葉が闇に描く軌跡を、穏やかな心で見つめていた。星ぼしのあわい光を浴びながら、しっかりと枝にしがみついている葉も、地面に散り敷いている葉も、静かな、そして凜りんとした、それは美しいきらめきを放っていた。

ひとつ気がついたのは、銀杏の木の一番下にある太い枝が、雑草におおわれたトンネルの入口に向かつて、一直線に伸びているということだった。そうだ、このことを忘れないようにしよう。今度来る時は、この枝を目印にすればいいんだ、と。

祖父といっしょに墓地を抜け、登山道をまっすぐくぐっていると、いつの間へのぼってきたのか、頭上には満月に近い明るい月が輝いていた。きれいだね、ああそうやな、とことばを交わしたきり、莉子は急に無口になった。

莉子を迎えにくると言っていた父が、もう到着しているところだろう。③ いったい、どんな顔をして会えばいいのやら。どうしてみんなに迷惑がかかるようなことをしたんだ、と言われたら？ そんなことを考えると、莉子は気が重くなった。

ふと、ほんのり甘いにおいがあたりに立ちこめていることに気がついて、莉子は道端に目をやった。そこには降り注ぐ月明かりの中で、ひそやかに咲き乱れるおしろい花の群落があった。

莉子はゆっくりと、その視線を祖父へと向けた。

大きな背中。少し猫背の骨ばった背中。規則正しいリズムを刻みながら、右に、左にと揺れている。Ⅱ

その無防備な背中を見つめているだけで、ざわついていた気持ちが安らぎ、穏やかになっていくのがわかった。莉子の抱えているさみしさやむなしさや、不安や心細さといったすべてのものを、その背中が黙って受け止めてくれているような気がした。

母屋おむやの前の駐車場が見えてきた。そこにとまっている父の車も。

坂道をくだってくる祖父と莉子に気づいた父は、「おお、戻ってきた！」とさけぶなり、あわてふためいたように二人のもとへと駆けてきた。

④ 「よかった。どこに行ったのかと思いました」

「遅うなりました。えらい心配かけましたのう」

と言って、祖父はひょっこりと頭をさげた。

「莉子」

父のことばは、今度は祖父のうしろにいた莉子に向けられた。

「帰るぞ。陸に留守番させてるんだ」

どんなに怒られるだろうかとびくびくしていたのに、父はそれきり莉子を責めたてることはなく、

「お世話になりました。ありがとうございました」

と、何度も祖父にお礼を言い、いそいそと駐車場へと引き返していった。

助手席では麻美ママが、莉子たちを待っていた。

麻美ママは、ずっと泣きどおしていたような、はれぼったい目をしていた。莉子と顔を合わせるなり、あわてていつもの笑顔を作って助手席から降りてきて、

「まあまあ、莉子ちゃん……」

と、その先は、くちびるを震わせているだけでことばにならなかった。

莉子が車の助手席に乗りこもうとした時、

「じゃあな」

と、祖父が声をかけてきた。莉子は振り返り、

「じゃあ」

とだけ返した。

車は、駐車場を出て祖父の家をあとにした。莉子は車の窓を開け、遠ざかっていく祖父に手を振った。そして、それが元氣な祖父を見た最後の夜になった。

⑦ あの時はあまり深く考えずに家を飛び出して、いろんな人に迷惑をかけてしまったけれど——と、莉子は振り返る。後悔はしていない。あの時の風景や、においや、祖父のことばを、こんなふうにいっただって思い出すことができるから。

「どれ、今年はおぼくがジャムを作ってやろう」

そう言ってほほ笑んだ、祖父のやさしさ、あたたかさ。

あの時、祖父は言いたかったのかもしれない。おまえがここに来たわけを知ってるよ、と。だれにも言えずにいることがあるなら、ぼくが聞いてやるよ、と。

それなら今、ここで言おう。おじいちゃん、ありがとう。⑧ わたしを探しにきてくれて、本当にうれしかったよ。

問一 波線部Ⅰ、Ⅱの本文中における意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

Ⅰ 目を凝らす

- ア まばたきする
- イ じっと見つめる
- ウ 目を見開く
- エ 目を細める

Ⅱ 無防備な

- ア 楽天的で後先を考えない様子
- イ 神経質で感情をむきだしにする様子
- ウ 穏やかで警戒心のない様子
- エ のんびりとして落ち着いた様子

問二 傍線部①「秘密のトンネル」は、何を象徴したものでですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 母と自分をつないでいるもの
- イ 今の生活から抜け出すためのもの
- ウ 祖父との思い出が詰まった場所
- エ 明るい未来を感じさせる場所

問三 傍線部②「穏やかな心」について、反対の意味で使われている表現を本文から十字で抜き出して答えなさい。

問四 傍線部③「いったい、どんな顔をして会えばいいのやら」とありますが、その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 家族にはもう二度と会いたくないと強く思っていたので、いまさら父親に対して自分がどのような態度で向き合えばよいか分からなかったから。

イ 祖父の家に向かった理由を父親がまったく理解しておらず、その理由について自分が一から説明しなければならぬことをむなしく感じたから。

ウ 家族や学校にどれだけ迷惑をかけたか自分では予想もできず、もう二度と周りの人からの信頼を取り戻すことはできなるとさみしく感じたから。

エ 家族には何も言わず祖父の家に向かったことを思い出し、自分がいなくなったことで家族に不安な思いをさせたことが改めて思い返されたから。

問五 傍線部④「『遅うなりました。えらい心配かけましたのう』と言って、祖父はひよっこりと頭をさげた」とありますが、この時の祖父の気持ちを説明したものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 父親に怒られたくはないので、とにかく謝って許してもらおうと思う気持ち。

イ 自分に責任があるような言い方することで、莉子をかばいたいと思う気持ち。

ウ 怒った父親の前でも落ち着いて振る舞うことで、莉子に頼られたいと思う気持ち。

エ 自分の落ち度を認めるふりをして、この場を何とかごまかそうと思う気持ち。

問六 傍線部⑤「父はそれきり莉子を責めたてることはなく」とありますが、その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 一人で留守番をさせている陸のことが気がかりで、一刻も早く家に帰りたいから。

イ 祖父のことばに遠慮をして、祖父の前で莉子を責め立てることは避けたかったから。

ウ 莉子の気持ちに気づいていて、とにかく無事に帰ってきてくれただけで十分だったから。

エ 泣いていた麻美ママの顔を見れば、自分のやったことの重大さに気づくと思ったから。

問七 傍線部⑥「莉子は車の窓を開け、遠ざかっていく祖父に手を振った」とありますが、莉子は祖父のことをどのような存在だと思っていますか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 祖父は決して口数が多い方ではないが、孫である自分の複雑な気持ちをしっかりと受け止めて寄り添ってくれる存在。

イ 祖父はいつでも孫である自分の気持ちを第一に考えてくれて、何か問題があるとすぐに駆けつけてくれる頼り甲斐のある存在。

ウ 祖父は孫である自分の気持ちを無条件に受け入れて包み込んでくれるが、一緒に暮らしていないので甘えることに遠慮がある存在。

エ 祖父は孫である自分の味方でいてくれるが、そのことがわだかまりとなってしまい莉子の両親とは疎遠になってしまった存在。

問八 傍線部⑦「あの時はあまり深く考えずに家を飛び出して、いろんな人に迷惑をかけてしまった」とありますが、莉子が心の中に抱えていた思いはどのような思いですか。本文から二十字以内で抜き出して答えなさい。

問九 傍線部⑧「わたしを探しにきてくれて、本当にうれしかったよ」とありますが、その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア これからは両親の元を離れて、祖父の住んでいる田舎で一緒に暮らしたいという自分の正直な気持ちを祖父が理解してくれたから。

イ 学校には行きたくないが、それと同じくらいに両親には心配をかけたくないという自分の複雑な思いを祖父が理解してくれたから。

ウ 普段は家族に心配をかけたたりしないが、この時は内面がしめつけられるような思いでいたことを祖父が理解してくれたから。

エ 麻美ママが泣いてしまったことで、自分に何か問題があるのではないかと不安に思っていたことを祖父が理解してくれたから。

問十 この文章における表現の特徴について説明したものととして、適当なものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア この文章は、主人公で中学二年生の莉子が祖父との思い出を回想する構成になっており、祖父を失った悲しみが効果的に表現されている。

イ 祖父が自分自身のことを「ぼく」と表現していることで、子どもの気持ちをよく理解できる若々しい祖父像を印象付けている。

ウ 莉子が墓地に通じる抜け道に行ってみたくなったという設定には、孤独に耐えきれず生きることに絶望している莉子の心情が込められている。

エ 「はらはらと舞い降りてくる落ち葉」や「ひそやかに咲き乱れるおしろい花の群落」のような情景描写を用いて、美しい風景を印象付けている。

オ 「はあ、と息を吐いた」「急に無口になった」「気が重くなった」など、それぞれの登場人物の気持ちの詳細に表現されている。

カ 「山ぶどう」が莉子と祖父を結び付ける大事なキーワードとして登場しており、主人公の若々しい感性や甘酸っぱい記憶を象徴している。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

去る^{まどぬ}※ 承安^{しちぢあん}の比^ひほひ、御在位^{ござい}のはじめつかた、御年十歳ばかりにもならせ給^{たま}ひけん、あまりに紅葉^{こうえき}を愛せさせ給ひて、※ 北の陣^{きたのぢん}に小山^{こやま}をつかせ、櫓^{やぐら}、楓^{かへ}の色うつくしうもみぢたるを植ゑさせ、紅葉^{もみぢ}の山となづけて、終日^{ひねもす}に 叡覽^{えいらん}あるに なほ飽き足らせ給はず。※ しかるをある夜^よ 野分^{のわか}はしたなう吹いて、紅葉^{もみぢ}みな吹きちらし、落葉^{らくえき}頗る狼藉^{らうせき}なり。※ 殿守^{どのもり}のとものみやぶこ朝ぎよめすとて是^{これ}をことごとく掃^はき捨ててけり。残れる枝散れる木葉^{このは}をかきあつめて、風^{かぜ}すさまじかりけるあしたなれば、※ 縫殿^{ぬひどの}の陣^{ぢん}にて、酒あたたためてたべける薪^{たきぎ}にこそしてけれ。※ 奉行^{ぶぎやう}の蔵人^{くらんじん}、行幸^{ぎやうかう}より先^{まづ}にといそぎ行きて見るに跡かたなし。「いかに」と問へばしかしかと言ふ。蔵人^{くらんじん} 大^{おほ}きにおどろき、「あなあさまし。君^{きみ}のさしも 執^{しつ}しおぼしめされつる紅葉^{もみぢ}を、かやうにしけるあさましさよ。知らず、なんぢ等^ら、只今禁獄^{きんごく}流罪^{りゆうざい}にも及び、わが身もいかなる逆鱗^{げきりん}にかあづからんずらん」と X ところに、^② 主上^{しゆじやう} いとどしく ※ 夜^よの大殿^{おほどの}を出でさせ給ひも あへず、 ^b かしこへ行幸^{ぎやうかう}なりて紅葉^{もみぢ}を叡覽^{えいらん}なるに、なかりければ、「いかに」と御たづねあるに、蔵人^{くらんじん}奏^{そう}すべき方^{かた}はなし。ありのままに奏聞^{そうもん}す。 ※ 天気^{てんき}ことに御心^{ごこころ}よげにうちゑませ給ひて、^③ 林間^{はやしま}に酒^{あたた}を煖^ぬめて紅葉^{もみぢ}を焼^たくといふ詩^{うた}の心をば、それらには誰^たがをしへけるぞや。^④ やさしうも 仕^{つか}りけるものかな」とて、かへつて 御感^{ごかん}にあづかりしうへは、あへて 勅勘^{ちよくかん}なかりけり。

『平家物語』から

(注) ※ 承安 ————— 年号。一一七一一七五年。高倉天皇が十一〜十五歳の頃。

※ 北の陣 ————— 天皇の御所の北側にある朔平門。そこに警備の者が駐在する場所があった。

- ※ 櫛、楓 — どちらも植物の名。
- ※ 叡覧 — 天皇がご覧になること。
- ※ 野分 — 秋に吹く暴風。
- ※ 殿守のとものみやづこ — 庭の掃除などをする役人。
- ※ 縫殿の陣 — 北の陣のこと。
- ※ 奉行の蔵人 — 監督の役人。
- ※ 行幸 — 天皇のおでかけ、お出まし。
- ※ 執しおぼしめされつる — 熱心に思っておられた。
- ※ いとどしく — ふだんよりいつそう早く。
- ※ 夜の大殿 — 天皇のご寢所。
- ※ あへず — くとすぐに。
- ※ 天気 — 天皇のご機嫌。
- ※ 仕りける — いたした。
- ※ 御感 — 天皇のおほめ。
- ※ 勅勘 — 天皇のおしかり、おとがめ。

問一 二重傍線部「うちゑませ給ひて」を現代仮名遣いに直し、すべて平仮名で書きなさい。

問二 傍線部Ⅰ〜Ⅲの口語訳として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

Ⅰ なほ飽き足らせ給はず

- ア まだお飽きにならない
- イ そんなに飽きていない
- ウ いつも飽きさせない
- エ やはりお飽きにならないだろう

Ⅱ 落葉頗る狼藉なり

- ア 落葉が跡かたなく無くなっていった
- イ 落葉はたいへん散らかっていた
- ウ 落葉がすっかり濡れてしまっていた
- エ 落葉は誰かがすべて片付けていた

Ⅲ 風すさまじかりけるあしたなれば

- ア 風が強く吹くのならば
- イ 風が冷たいと思われる明日に
- ウ 風が心地よく吹く日なので
- エ 風が冷たかった朝なので

問三 波線部 a 「君」、b 「かしこ」とありますが、それぞれ何を指していますか。本文から三字以内で抜き出して答えなさい。

問四 傍線部①「大きにおどろき」について、奉行の蔵人はどのようなことに驚いたのですか。その内容として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 天皇が興味を持って見ていたとは知らずに枝から紅葉をすっかり落としてしまい、昨日とは様子が一変したこと。

イ 天皇が興味を持って見ていた紅葉を捨てたり薪にしてしまったりして、何もない状態にしてしまったこと。

ウ 天皇が興味を持って見ていた紅葉をわざと捨てたり燃やしたりして、部下の者が自分を困らせようとしたこと。

エ 天皇が興味を持って見ていた紅葉ということを知りながら、わざと捨てたり薪にしたりしてしまったこと。

問五 文中の X に入る最も適当な語句を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ほむる

イ よろこぶ

ウ なげく

エ をしふる

問六 傍線部②「主上いとどしく夜の大殿を出でさせ給ひ」とありますが、その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 落葉した紅葉を薪にしようと思い、紅葉を捨てないように役人に伝えたかったから。

イ 暴風により施設に被害が発生したため、役人たちは無事であるのか確認したかったから。

ウ これから更に天候は悪化すると考え、災害に対する備えを一刻も早くさせたかったから。

エ 暴風があまりにも激しかったために、紅葉がどうなってしまったのかを心配したから。

問七 傍線部③「林間に酒を煖めて紅葉を焼く」という書き下し文の読み方になるように、解答欄の漢文の適当な箇所を、返り点をつけなさい。

問八 傍線部④「やさしうも仕りけるものかな」とありますが、このことの内容が書かれている一文を本文から抜き出し、最初の五字を答えなさい。

問九 本文の内容と合致しているものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 庭の掃除をする役人は天皇が気に入っている紅葉だということを理解していたが、欲望に負け、自分の酒をあたためるための薪にしまった。

イ 天皇は紅葉を大変気に入り、紅葉をそのままにしておくように指示したが、掃除の役人はその指示を理解できずに紅葉を台無しにしてしまった。

ウ 監督の役人は天皇が気に入っていた紅葉がすっかり無くなっているのを目にして、自分にもどんな処罰が下されるかと気が気ではなかった。

エ 監督の役人は自分の不手際に対して天皇からの厳しい処罰を覚悟していたが、天皇は腹立たしさを抑えて、監督の役人には処罰を下さなかった。